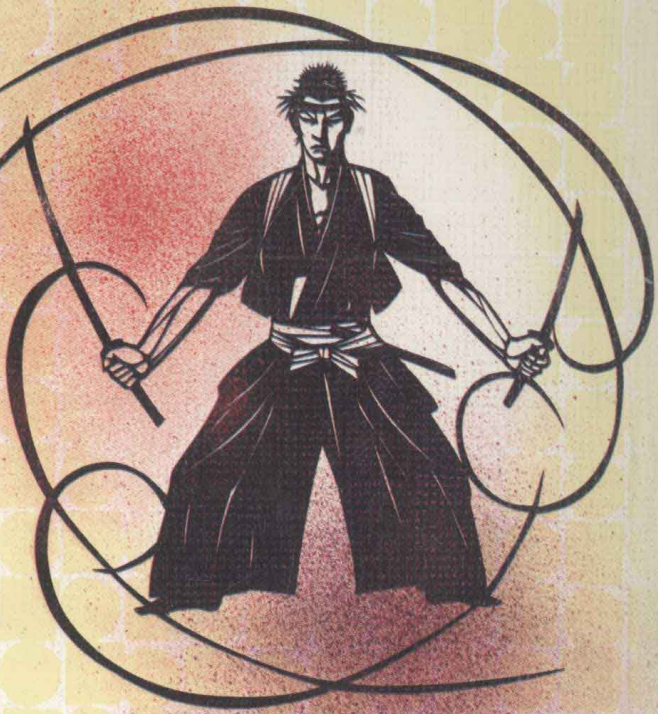
# 宮本武蔵(二)



吉川英治文庫

昭和50年６月１日　第１刷発行
昭和59年１月20日　第23刷発行

吉川英治文庫49
宮本武蔵(二)
定価480円

著者　吉川英治
編集　株式会社 六興出版内
吉川英治文庫刊行会
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽２―12―21
振替東京８―３９３０
電話東京03(945)1111(大代表)
印刷所
製本所　凸版印刷株式会社

Printed in Japan
©吉川文子　1975
(文２)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-142049-6(1)

吉川英治文庫

49

# 宮本武蔵（二）

講談社

# 目次

水の巻（つづき）　七
火の巻　一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

さしえ

矢野橋村

# 宮本武蔵
(二)

# 水の巻（つづき）

## 奈良の宿

### 一

「敗けた。おれは敗れた」

暗い杉林の中の小道を、武蔵はこう独り呟きながら帰って行く。

時折、杉の木蔭を、迅い影が横に跳ぶ。彼の跫音におどろいて駈ける鹿の群だった。

「強いことにおいておれは勝っている。——しかし敗けたような気持を負って宝蔵院の門を出てきた。——形では勝ったが敗けている証拠ではないか」

甘んじられない容子なのである。むしろ無念らしく、未熟者未熟者と、自分を罵りながら歩いているかのように、うつつに歩いていた。

「あ」

何か思い出したのであろう、立ちどまって振向いた。宝蔵院の灯は、まだ後ろに見えていた。

駈け戻って、今出て来た玄関に立ち、
「ただ今の、宮本でござるが」
「ほう」
と、玄関坊が顔を出し、
「なんぞお忘れ物か」
「明日か明後日あたり、私をたずねて、当院へ聞きに参る者があるはずですが、もしその者が見えたときは、宮本は当所の猿沢の池のあたりにわらじを解いているゆえ、あの辺の旅籠の軒を見て歩け、とお伝えを願いたいのです」
「ああ、左様か」
うわの空な返辞なので、武蔵は心もとなく思い、
「ここへ後から尋ねて来る者は、城太郎と申して、まだ年端のゆかぬ少年ですから、どうぞ諒と、お伝え願いまする」
いいおいて、元の道をまた大股に引き返しながら、武蔵はつぶやいた。
「やはり、敗けているのだ。——城太郎の言伝てをいい忘れて出て来ただけでも、おれはあの老僧の日観に敗けを負わされて戻っている！」
どうしたら天下無敵の剣になれるか。武蔵は、寝ても醒めても、病のように取り憑かれているのである。
この剣、この一剣。
勝って帰る宝蔵院から、どうして、この苦い自分の未熟さが、こびりついて来るのだろう。

何としても、楽しめない気持らしい。

快々と、惑いながら、彼の脚はもう猿沢の池畔へ出ていた。

この池を中心に、狭井川の下流へかけて、天正ごろから殖えた新しい民家が乱雑に建てこんでいた。つい近年、徳川家の手代大久保長安が、奈良奉行所を設けた一廓も近くであるし、中華の帰化人で林和靖の後裔だという者が店をひらいた宗因饅頭もよく売れるとみえ、池へ向って店をひろげている。

そこらのまばらな宵の燈を見ると、武蔵は足をとめて、どこに泊ったものか、旅籠に迷った。旅籠はいくらもあるらしいが、路銀の都合もあるし、そうかといって、あまり場末や路地の木賃では、後から捜して来る城太郎にわかりにくかろう。

今し方、宝蔵院で接待にあずかって来たばかりであるが、宗因饅頭の前を通ると、武蔵は食慾をおぼえた。

腰かけへ立ち寄って、饅頭を一盆とってみる。饅頭の皮には「林」の字が焼いてあった。ここで食べる饅頭の味は、宝蔵院で食べた瓜漬の味のように舌にわからないことはなかった。

「旦那さま、今夜はどちらへお泊りでございますか」

そこの茶汲み女に話しかけられたのを幸いに、わけを話して計ってみると、それなら店の身寄りの者が内職に宿屋をしているちょうどよい家があります、ぜひそこへ泊っていただきたい、ただ今主人を呼んで参りますからと、まだ武蔵が泊るとも何ともいわないうちに、もう奥へ走って、青眉の若女房を呼び出して来た。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

## 二

宗因饅頭の店からそう遠くもない、しかも静かな小路の素人家。

案内して来た青眉の女房は、小門の戸をほとほとたたいて、中の答えを聞いて後、武蔵を振り向いて、静かにいう。

「わたくしの姉の家でございますから、お心づけなども、ご心配なく」

小女が出て来て、女房と何か囁いていたが、すべて心得ているらしく武蔵を先へ二階へ通し、女房はすぐ、

「では、御ゆるり遊ばせ」

と帰ってしまった。

旅籠にしては、部屋も調度も上等すぎる、武蔵はかえって落着かなかった。

食事はすんでいるので、風呂に入ると、寝るよりほかはない。そう生活に困るでもないらしいこの家構えを持って、何で旅人などを泊めるのか、武蔵は、寝るにも気がかりであった。

小女にわけを訊いても、笑っていて答えないのである。

翌日になって、

「後から連れが尋ねて来るはずゆえ、もう一両日泊めてもらいたいが」

というと、

「どうぞ」

小女が階下の主に告げたのであろう、やがて、その女主人があいさつに見えた。三十ぐらいな

肌目のよい美人である。武蔵がさっそく不審をただすと、その美人が笑って話すにはこうであった。

実は自分は、観世なにがしと呼ぶ能楽師の後家であるが、この奈良には今、素姓の知れない牢人がたくさん住んでいて、風紀の悪いことはお話にならない。

そうした牢人たちのために、木辻あたりには、いかがわしい飲食店や白粉の女が急激にふえているが、不逞な牢人たちは、そんなところではほんとに娯まない。土地の若い者などを語らって、毎晩のように「後家見舞」と称して、男気のない家を襲ってあるくことが流行っている。

関ヶ原以後は、すこし戦がやんでいる形にあるが、年々の合戦で、どこの地方にも、浮浪人の数がおびただしく増している。そこで、諸国の城下に、悪い夜遊びが流行ったり窃盗沙汰だの強請者が横行している。こんな悪風は、朝鮮役後からの現象で、太閤様が生んだものだと恨んでいる声もあるとか。とにかく、全国的に今は悪い風紀が漲っている。——それと関ヶ原牢人のくずれが入り込んで来たため、この奈良の町でも、新任の奉行などでは取締りようもない有様だというのである。

「ははあ、それで拙者のような旅人を、魔除けにお泊めなさるわけだな」

「男気がないものですから」

と、美人の後家が笑った、武蔵も苦笑がやまない。

「そんなわけですから、どうぞ幾日でも」

「心得た、拙者のいるうちは、安心なさるがよい。しかし連れの者が、追ッつけここへ捜して来ることになっている。門口へ、何か目印を出してもらいたいが」

「よろしゅうございます」
後家は魔除け札のように、
宮本様お泊
と紙片れに書いて外へ貼った。
その日も、城太郎は来なかった。すると次の日である。
「宮本先生に拝顔したい」
と三名づれの武芸者が入って来た。断ってもただ帰りそうもない風態だというので、ともかく上げて会ってみると、それは宝蔵院で武蔵が阿巌を仆した折に、溜りの中にいて見物していた者達で、
「やあ」
と、旧知のように馴々しく、彼を囲んで坐りこんだ。

## 三

「いやどうも、なんとも驚き入ったわけです」
坐るとすぐ、その三名は、誇張したもののいい方で、武蔵をおだて抜くのであった。
「おそらく、宝蔵院を訪れた者で、あそこの七足と呼ぶ高弟を一撃で仆したなどという記録は、今までにないことでござろう。殊に、あの傲岸な阿巌が、うんと呻ったきり、血涎れを出して参ってしまうなどは、近ごろ愉快きわまることだ」
「吾々のうちでも、えらい評にのぼっておる。一体、宮本武蔵とは何者であろうなど、当地の牢

人仲間では、寄るとさわると、貴公のうわさであるし、同時に、宝蔵院もすっかり看板へ味噌をつけてしまったというておる」

「まず、尊公のごときは、天下無双といってもさしつかえあるまい」

「年ばえもまだお若いしな」

「伸びる将来性は、多分に持っておられるし」

「失礼ながら、それほどな実力を持ちながら、牢人しておらるるなどとは、勿体ない」

茶が来れば茶をガブ飲みにし、菓子がくれば菓子の屑を膝にこぼしてボリボリむさぼる。

そして、賞められている当人の武蔵が顔のやり場に困るほど、口を極めて称揚するのである。

おかしくも、擽ぐッたくもないような顔をして、武蔵は相手が黙るまで喋舌らせておいたが、果てしがないので、

「して各〻は？」

姓名を訊ねると初めて、

「そうそう、これは失礼をしておった。それがしは、もと蒲生殿の家人で、山添団八」

「此方は大友伴立と申し、卜伝流を究め、いささか大志を抱いて、時勢にのぞまんとする野望もある者でござる」

「また、てまえは、野洲川安兵衛といい織田殿以来、牢人の子の牢人者で。……ははははは」

これで一通り素姓は分ったが、何のために自分の貴重な時間をつぶして他人の貴重な時間を邪魔しに来たのか、それも武蔵の方から聞かないうちは埒があかないので、

「時に、御用向きは何であるか」

話のすきを見ていうと、

「そうそう」

と、それも今さら気がついたように、実は、折入っての相談でやって来たのだがと、遽に、膝をすすめていう。

――ほかでもないが、この奈良の春日の下で、自分たちで今、興行をもくろんでいる。興行というと能芝居や人寄せの見世物とお考えになるだろうが、さにあらず、大いに民衆のうちへ武術を理解させるための賭試合である。

今、小屋を掛けさせつつある所だが、前人気はなかなかよい。だが、三人では実はすこし手が足りない気がするし、いかなる豪の者が出て来て、折角の利益を一勝負でさらわれてしまわないとも限らないので――実は、其許に一枚入ってもらえまいかと、談合にやって来たわけである。承知してくれれば、利益は勿論山分け、その間の食費、宿料も一切こっちで持とう。ひと儲けして、次の旅へ向われる路銀をおこしらえになってはいかが？

――頻りとすすめるのを、武蔵はにやにや聞いていたが、もう飽々したという態で、

「いや、そういう御用なら、長座は無用、御めんをこうむる」

あっさり断ると、三名の方では、むしろ意外とするらしく、

「なぜで？」

とたたみかけて来る。

そこまで至ると、武蔵はすこし憤かついて来て、青年の一徹を示し、昂然といった。

「拙者は、ばくち打ちではない。また、飯は箸で食う男で、木剣では食わん男だ」

「なに、なんだと」

「わからんか、宮本は痩せても枯れても、剣人をもって任じておるのだ、馬鹿、帰れっ」

## 四

ふふんと、一人は冷笑を唇の辺にながし、一人は赤い怒気を顔にふき出して、

「忘れるな」

それが、捨て科白だった。

自分たちが束になっても、勝ち目のないことをその三名はよく心得ている。かなり苦い顔つきと、腹の中のものを抑えて、ただ跫音と態度にだけ、

(これだけで帰るのでないぞ)

の意思を示し、どやどや外へ出て行ったのである。

この頃は毎晩が肌ぬるいおぼろ夜だった。階下の若い御寮人は、武蔵が泊っているうちは安心だといって一方ならない馳走をするのであった。きのうも今宵も、武蔵は階下でもてなされて、快く酔ったからだを長々と、灯りのない二階の一間に横たえて、思うさま若い手脚をのばしていた。

「残念だ」

又しても、奥蔵院の日観のことばが頭にうかぶ。

自分の剣で打負かした者はみな、たとえそれが半死にさせた者でも、武蔵は次々に泡沫のように頭からその人間を忘れてしまうのであったが、少しでも、自分よりは優れた者——自分が圧倒

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb